

奈良西部公民館

『日本書紀』が語る神武天皇の誕生

二〇二二年三月十九日（金）

楽しい記紀巡り

——大和での決戦——

大阪市立大学研究員 岡田高志

■この資料を手にとってくださる方へ

はじめまして！ 大阪市立大学都市文化研究センター研究員（古代日本文学専攻）の岡田高志おかだたかしと申します。奈良西部公民館主催『日本書紀』が語る神武天皇の誕生——大和での決戦——の講座にご応募いただき、ありがとうございます。また、たくさんのご応募があったにも拘わからず、新型コロナウイルスの流行により、やむを得ず、参加者の定員を制限（密集を避けるため）、当日はご参加できなかつたという方を多く出してしまい、大変申し訳ありませんでした。

次善の策ではありませんが、ご自宅でも当日の講座内容を知ってもらえるよう、配付資料に、ささやかな解説（「▽」マークの付いてある箇所）を付けて稿に起こした次第です。外出の自粛が推奨される中、ご自宅にて、古いにしえの物語——、日の出づる東方を指して、遙かな旅を続けた、第一代「神武天皇」の伝承に想いを馳せ、新たな感動と、どこか懐かしい想いを抱いていただけたら……。

そんな願いを込めて文章を綴りました。どうぞ、一時の空想の旅路をお楽しみください。また、安全に講座の行える時節を待って、みなさまの前で、新たなお話を語る事ができる日を心待ちにしております。

岡田高志 謹白

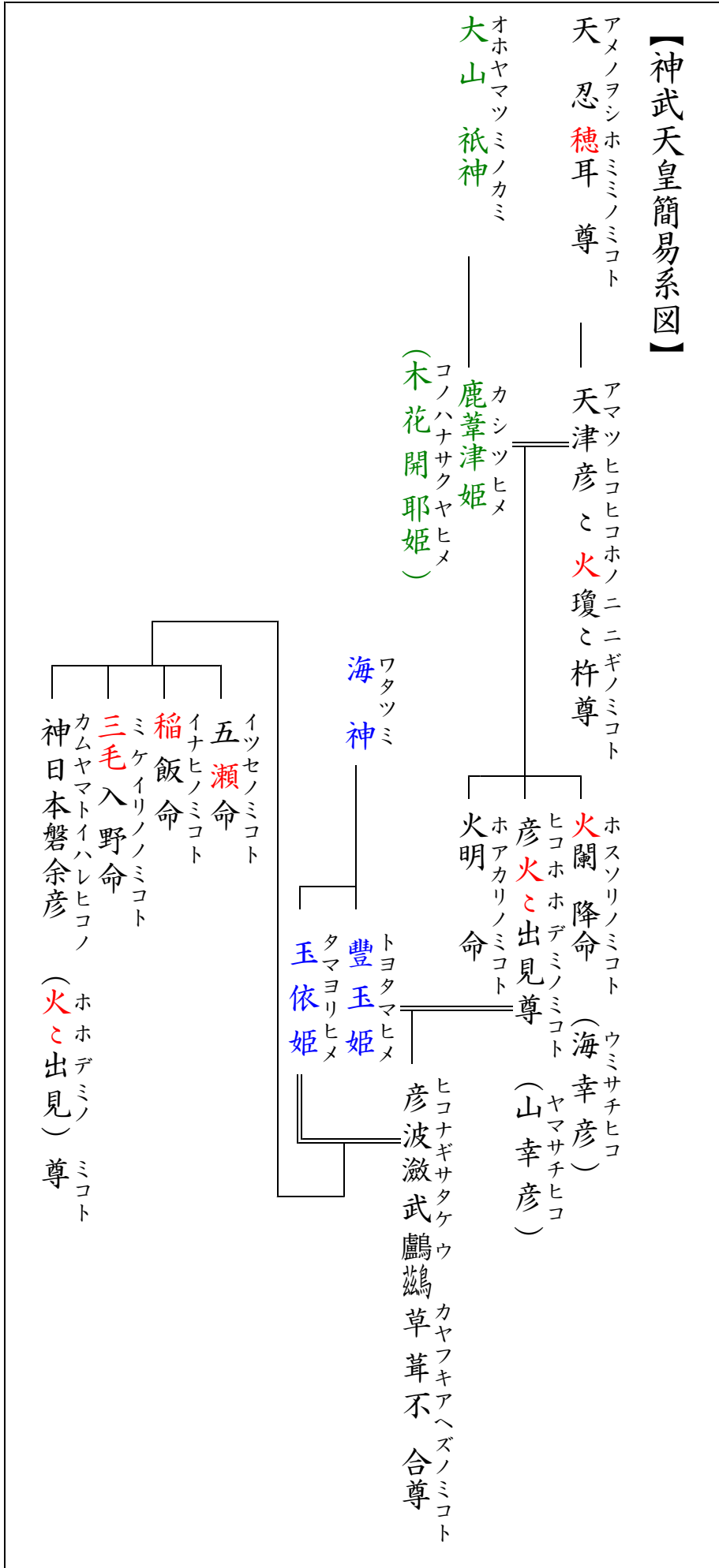
■神武天皇の血統

▽物語に入る前に神武天皇の血統を確認してみましよう！

アマテラスオホミカミ
天照大神(太陽神)の孫、瓊と杵
ニニギノ

ミコト
尊 が山の神の娘「鹿葦津姫」を妻とし、生まれたのが「彦火と出見尊」。さらに、から二
代に渡る海の神の娘との交合を通して生まれた四人兄弟の末っ子が「神日本磐余彦(火と出見)
ミコト
尊」、すなわち、第一代「神武天皇」なのです。

【神武天皇簡易系図】



■東遷の決意

▽「神日本磐余彦尊」の東遷(東に進むこと)の決意、及び大和までの旅を『日本書紀』の本文

(書き下し文 原文は漢文)とダイジェストで見えます!

〔四十五才〕

年卅 五歳に及びて、諸の兄及び子等に謂りて曰はく、「昔、我が天神、高皇産靈尊

・大日靈尊、此の豊葦原瑞穂國を擧げて、我が天祖彦火瓊と杵尊に授けたまへ

り。是に、火瓊と杵尊、天關を開け雲路を披き、仙蹕を駈けしめて戻り止る。是の時、

運鴻荒に屬り、時草昧に鍾れり。故、蒙くして正を養ひて此の西の偏を治む。皇祖皇考、

乃ち神乃ち聖にして、慶を積み暉を重ねて、多く年所を歴ねたり。天祖の降りし

跡より以て今に一百七十九萬二千四百七十餘歳に逮ぶ。而れども、遼く邈かなる地、猶未

だ王澤に霑はず。遂に邑に君有り、村に長有りて、各自ら疆を分ちて、用て相凌ぎ躒

かしむ。抑又、鹽土老翁に聞く。曰はく、『東に美き地有り。青山四を周れり。其の

騒いでおります。』

〔大日靈尊〕天照大神の古称

〔豊葦原瑞穂國〕高天原から見た地上の呼称

〔彦火瓊と杵尊〕天より降った、天照の孫

〔天の御門を開けて雲の道を開き、先払いを駆けさせ、この地に至り留まった。〕

〔天の徳が行き届いていない。〕

〔天磐船〕岩で造られた空飛ぶ船

に亦、天磐船また アメノイハフネに乗りて飛び降る者有り』と。余謂ふに、彼の地は、必ずもつ以て大業を恢弘ひろ

〔光宅〕天の徳が天下を照らし満ちること 〔六合〕天・地・東・西・南・北

め、天下を光宅するに足るべし。蓋し六合の中心ならんか。厥の飛び降る者は、是を饒速日ニギハヤヒ

〔そこに向かい都を創ろう！〕

と謂ふか。何ぞ就きて都せざらむ』と。諸の皇子對へて曰はく、「理實道理は明らかであります。に灼然じつしやくぜんたり。我

〔ずっとそう考えておりました。〕

も恆つねに以て念と爲す。早すみやかに行ひたまへ』と。〔日本書紀〕卷第三、即位前紀甲寅年

東ひむがしの方かたへ――

○十月五日、東に向けて出発。「速吸之門」ハヤスヒナト（豊予海峡？）で漁師「珍彦」ウツヒコ帰服。「椎根津彦」と名づけ、船

団の導き手とする。さらに進み、「菟狭」ウサ（大分県宇佐市）に至る。「菟狭津彦」・「菟狭津媛」、磐余彦を饗応。

○十一月九日、「岡水門」ヲカノミナト（福岡県遠賀郡芦屋町遠賀川河口付近）に至る。

○「安藝國」の「埃宮」アキノクニ エノミヤ（広島県安芸郡府中町）に至る。

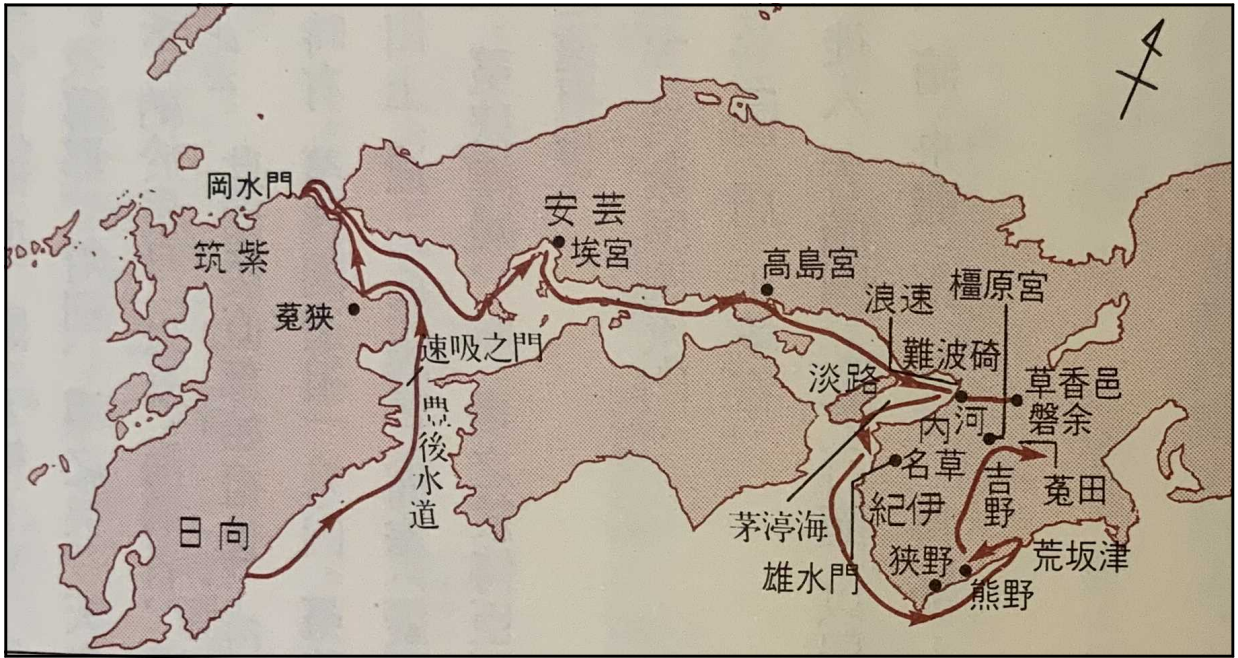
○乙卯の年（東遷二年目）の三月六日、「吉備國」キビノクニに至る。行宮「高島宮」で船と兵糧を蓄えることを企図。

○戊午の年（東遷五年目）の二月十一日、東に向け、船団出発。「難波碕」ナニハノサキ（大阪府中央区上町台地北端）

北区天満付近）に至る。浪の勢い速し。「浪速國」と名づける。

○三月十日、河内湖から大和川を遡り「河内國」カフチノクニ（大阪府東部）の「草香邑青雲 白肩之津」クサカノムラアラクモノシラカタノツ（東大阪市北東

に至る。



上「神武天皇東征要路」

(新日本古典文学全集『日本書紀』①、小島憲之・直木孝次郎・

西宮一民・葺中進・毛利正守校注・訳、一九九四年四月、小学館)

右「上町台地と難波宮」

(シリーズ遺跡を学ぶ『東アジアに開かれた古代王宮 難波宮』

積山洋、二〇一四年八月、新泉社)



■生駒山の戦い——V.S.「長髓彦」第一戦——

ナガスネヒコ

イハレヒコ

▽五年に渡る旅を経て、河内國に到達した磐余彦！ 生駒山脈を越えれば、そこは大和——。
しかし、そこには最大の強敵、「長髓彦」が待ち受けていました。

〔九日〕

〔皇師〕|| 天皇の軍勢

〔龍田〕|| 生駒山脈の最南端の古称

夏四月の丙申の朔の甲辰、皇師、兵を勒へ、歩きて龍田に趣く。而れども其

〔道は狭く、けわしくて、兵達は並んで進むことができない。〕

〔東に進んで〕

の路狭く峻しくして、人並び行くことを得ず。乃ち還りて更に東して膽駒山を踰え、

〔中州〕|| 大和国の内部

ナガスネヒコ

〔やってきた理由は、〕

中洲に入らむとす。時に、長髓彦聞きて曰はく、「夫れ、天神の子等の來る所以は、必

〔我が國を奪おうとしているのだろうか〕

〔孔舍衛坂〕|| 東大阪市北東く生駒山にかけての坂

ず我が國を奪はむとならむ」と。則ち、屬へる兵を盡く起して、孔舍衛坂に徼りて與

〔進軍することができない。〕

に會ひ戦ふ。流るる矢有りて五瀬命の肱脛に中れり。皇師、進み戦ふこと能はず。天

〔冲衿〕|| 胸の内深く

皇憂ひて、乃ち、神策を冲衿に運めて曰はく、「今、我は是、日の神の子孫にして、日

〔虜〕|| 敵の蔑称。賊 〔天の定めた道に反している。〕

〔弱いと見せかけておいて、〕〔神祇〕|| 天つ神・國つ神

に向ひて虜を征つは、此天道に逆らふ。退き還りて弱きことを示し、神祇を禮ひ祭りて背

〔ご威光を背に受け、その加護を受けて圧倒し、踏みつけるのが一番である。〕

〔刃を血に染めることなく、〕

に日神の威を負ひ、影に隨ひて壓へ躡むに若かじ。此の如くせば、曾ち刃に血らずして、

〈賊は自然と敗走するであろう〉

虜をの必ず自をのづから敗れむ」と。僉みない曰はく、「然しかり」と。是ここに、軍中に令みことのりして曰いはく、「且しば

〈進軍を止めよ。これ以上進んではならない〉

らく停とどまれ。復進またむべからず」と。乃すなはち、軍を引き返りたまふ。虜亦またあ敢へて逼せまらず。却かへ

〔「草香津」＝河内湖湖畔〕

りて草香津に至りて、盾を植たてて雄誥をたけびしたまふ。因よりて、改めて其の津を號なづけて楯津タテツと曰い

〔発音が訛ったのである。〕

ふ。今、蓼津タテツと云ふは訛よこなまれるなり。〔『日本書紀』卷第三、即位前紀戊午年〕

熊野を抜けて——天つ神の加護——

▽長髓彦の軍勢を前に、手痛い敗北を喫した磐余彦イハレヒコは、泉南おのさと紀伊半島を巡り、熊野の山道を

抜け、大和を背撃しようと謀ります。

○五月八日、「茅渟山チヌノヤマシロノミナト城水門」(大阪府泉南市男里天神の森付近)にて、五瀬命イツセノミコト、先の戦いにおいて、

流れ矢で受けた傷が悪化し、薨去。「紀伊國キノクニ」の「竈山カヤマ」(和歌山市和田)まで進んで葬送。

○六月二十三日、「名草ナクサノムラ邑」(和歌山市名草山付近)で「名草戸畔ナクサトベ」を討つ。「佐野サノ」(新宮市佐野)を越えて

「熊野神クマノノミワノムラ邑」(熊野速玉大社付近)に至り、「天アマノ磐楯イハタテ」(新宮市神倉山)に登る。海を渡るとき、暴風に遭

い、海ワタツミ神の心を鎮めるため、稻飯命イナヒノミコト・三毛入野命ミケイリノノミコト、波濤を踏んで「常世郷トコヨノサト」(海神の世界)に去る。

(以下、『日本書紀』の所伝を現代語訳で示す。現代語訳は、中公文庫『日本書紀』(井上光貞監訳、川副武胤

さえきありきよ

・佐伯有清(神武) 記、二〇二〇年六月 ※初出一九八七年三月を参照して作成した。以下、同。

こうして、

天皇はただ一人、皇子手研耳命タギシミニノミコトと、軍をひきいて進み、熊野の荒坂津アラサカノツ〔別名、

ニシキノウラ

丹敷浦〕に到着された。ここで丹敷戸畔ニシキノトベという女賊によぞくを誅殺した。ところがこのとき、神がい

て、毒気を吐いて、人々はすべて病み伏してしまった。このため、皇軍は起き上がることができな

かった。するとここに熊野の高倉下タカクラジという人物がいた。この人物のその夜の夢に、天照大神アマテラスオホミカミ

が武甕雷神タケミカヅチノカミに、

「葦原中アシハラノナカツクニ国はいまなおさやげりなり(さわがしいようだ)。おまえがまた行

って征伐してまいれ」と仰せられると、武甕雷神はお答えして、「私がまいりませんでも、私が国

を平らげた剣(国譲りの交渉に、この神が出雲にたずさえられた剣のこと)を下せば、国は自然に

平らぐことと存じます」と申し上げた。天照大神は、「諾うべなり(よかろう)」と仰せられた。

そこで武甕雷神は、こんどは高倉タカクラジ (下) に、「私の剣を師フツノミタマ 霊」というが、いまこれをお前の庫くら

のなかに置こう。この剣をもって天孫に献上せよ」と仰せられた。高倉 (下) は、「はいはい」と

お答えしたと思つたら眼がさめた。

朝はやく起きて、夢の中の神の教えのとおり在庫をあけてみると、はたして天から落とされた一

ふりの剣がさかさまに庫の底板に立っていた。そこでこれを天皇に献上した。そのとき、天皇はよ

くねむっておられたが、たちまちめざめて、「余はなぜこんな長寝していたのだらう」と仰せら

れた。ついで毒気にあてられた士卒はすべてめざめて起き出した。

さて皇軍は内うちつくに 国に進んで行こうとしたが、山中がけわしくて、軍の通れる道がなく、そのため

進むことも退くこともできないでさまよっていた。そんなある夜、天皇が夢見給うには、天照大神が天皇に教えられて、「私が今頭八咫鳥やたがらすを遣わすから、これを先導者とするがよからう」ということであった。はたして頭八咫鳥が空から飛び降ってきた。天皇はこれを御覧になって、「この鳥が来たのは瑞夢ずいむのとおりである。大きくもまたさかんな皇祖天照大神の御徳よ。神はこうして天つ日つぎの大業を助けてくださるのであるうか」と仰せられた。

○磐余彦イハレヒコ、八咫鳥の先導を受け、「日臣命ヒノオミノミコト」(「大伴オホトモ」氏祖先)を將軍として「大來目オホクメ」を率いさせ、遂に、「菟田ウダ」(奈良県宇陀市)に到着。磐余彦、日臣命の功績を褒め、「道臣ミチノオミ」の名を与える。

下「熊野那智大社の火祭り」(二〇一七年七月十四日撮影)



■大和の攻防

▽立ちはだかる苦難を、神々の加護によって乗り越え、八咫鳥の導きにより、磐余彦は東方より大和に侵入することに成功！ 平野部の諸豪族たちを討ち従えてゆきます。長髓彦との再戦は目前に迫っていました。

○八月二日、菟田の首長である「兄猾」・「弟猾」を招喚。弟猾、兄が磐余彦を新宮に誘い出して、「機」(踏めば圧死するバネ仕掛け) にかけてようとしていることを密告。

時に、道臣命、審に賊の害はんとする心有るを知りて、大いに怒り、誥び嘖めて曰

はく、虜よ、余が造れる所の屋は、余自ら居れ。因りて劔を案り弓を彎きて、逼りて催

し入れしむ。兄猾罪を天に獲て、事辭する所無し。乃ち、自ら機を踏みて壓死す。時に、

其の屍を陳べて斬る。流るる血、踝を没す。故、其の地を號けて、菟田の血原と曰ふ。

(『日本書紀』卷第三、即位前紀甲寅年)

○磐余彦、吉野を視察。湧き水の中から光るしっぽの生えた人が出現、「井光」と名告り帰順する。さらに、吉野川に沿って西に行き、「苞苴担之子」(贅の献上役の青年)と名乗る漁師(「養鷗部」始祖)と出会う。

○九月五日、菟田の「高倉山」(大宇陀守道の山。標高四四〇メートル)に登り、国内を遠望。「國見丘」

(宇陀市・桜井市中間にあるに経ヶ塚山か?)に八十梟師(数多の勇猛な士)「女坂」(大宇陀宮奥

付近)に女軍、「男坂」(大宇陀半阪)に男軍がひしめき合い、「墨坂」(榛原西方の坂)に火の

おこった炭が置かれてあるのを見る。さらに、「磐余邑」(香具山北東、桜井市戒重付近)には「兄磯城」

の軍が集結していた。この夜、夢に神託あり。「天香山」(香具山)の赤土(赤黄色の粘土)で平瓮八十枚、

巖瓮(神酒を入れる聖なる瓶)を造り、天つ神・國つ神を祭り、呪文を唱えるよう告げる。弟猾、神

託の指示を遂行するように進言し、天皇もこれを吉兆として、すぐさま実行に移す。

(以下、現代語訳で所伝を示す。)

そして、椎根津彦にいやしい衣装と蓑笠を着せて、老翁の姿につくらせて、また弟猾に箕を着

せて老女の姿をつくらせ、二人に命じて、「おまえたち二人は天香山に行つて、こつそり頂上の土

を取つて帰つてまいれ。国家統治の大業の成否は、おまえたちの仕事にかかっているぞ。慎重に頼

むぞ」と仰せられた。

このとき、賊軍は道いっぱい駐屯していて、通ることができない。そこで椎根津彦は祈請をし

て、「天皇がほんとうにこの国を統一することがおできになるものならば、行く道が自然に通れる

だろう。反対に、もし天皇の御平定の事業が不可能なものならば、賊軍にきまたげられよう」と言

い、言いおわるとすぐに出かけた。

賊兵たちは二人を見て、大笑いをして、「大醜(なんてきたならしい)じじい、ばばあだ」と

言って、みんな道をあけて二人を通した。二人は無事に山に着き、土を取って持ちかえった。

○磐余彦、事の成功を喜び、早速、平瓮・巖瓮を造る。菟田川のほとり、朝原（榛原丹生神付近）で呪

いを唱える。「もし平瓮を使い、水無くして飴（アメ。粉に水を加え、練り固めて作る）ができたならば、

天下を平定できるだろう」と言う。飴、自ずとできあがる。また、「巖瓮を丹生の川（菟田の川の異称）に

鎮め、魚が大小問わずに、酔って川を槇の葉のように流れたなら、この国を平定できるだろう」と言う。

占い成就。神々を祭る。

○十月一日、國見丘に八十梟師を破る。道臣命に大來目の戦士を率いさせ、「忍坂邑」（桜井市

忍坂）に八十梟師の残党を呼び寄せ、饗宴すると見せかけ、殺すよう命じる。道臣命たち、忍坂に窞

を掘って賊を歓待。宴酣なるに及んで道臣命の歌声が響きわたる――、

忍坂の 大室屋に

人多に 入り居りとも
人多に 來入り居りとも

下「頭槌の大刀」
（日本古典文学全集『古事記』

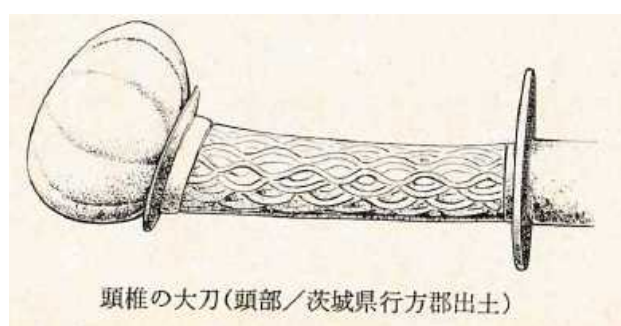
（「みつみつし」||いかめしい）
一九七三年十一月

みつみつし 來目の子等が
荻原浅男 校注・訳
小学館

（「頭椎」・「石椎」||前者は劍の柄頭が塊状のもの、後者は柄頭が石製のもの）

頭椎い 石椎い持ち 撃ちてしまむ！

歌声を合図にして、來目の戦士たちが一斉に斬りかかり、賊を滅ぼした。



頭椎の大刀(頭部/茨城県行方郡出土)

○十一月七日、「兄磯城」・「弟磯城」を攻撃。八咫鳥を遣わし、降伏を勧告するも、兄磯城従わず。弟磯城は

降り、磐余彦に兄の悪心を説く。磐余彦、弟磯城を遣わし、再度降伏を勧告するも、兄磯城固く受けず。

磐余彦、菟田川の水で墨坂の火を消し止めて進軍。兄磯城、滅びる。

■「金鷄」飛來す——V.S.「長髓彦」第二戦——

▽大和平野を制圧した磐余彦——、陽の光を背に、長髓彦といぎ、決戦！

十有二月の癸巳の朔の丙申に、皇師遂に長髓彦を撃つ。連に戦ひて取勝つこと能

はず。時に、忽然に天陰り氷雨る。乃ち、金色の靈しき鷄有りて、飛び來りて皇弓の弭

に止る。其の鷄光り曄煜きて、状流電の如し。是に由りて、長髓彦が軍卒、皆迷ひ眩ひて、

復力戦せず。長髓は是邑の本の號なり。因りて、亦以て人の名とす。皇軍の、鷄の瑞を

得るに及びて、時の人仍りて鷄邑と號く。今、鳥見と云ふは、是訛れるなり。昔、孔舍衛

の戦ひに、五瀬命、矢に中りて薨じぬ。天皇之を銜みもちて常に憤懣を懷きたま

〔戦役〕

〔誅殺し尽くそうと思う。〕

〔お歌いになったことには、〕

ふ。此の役に至りて誅することを窮めむと意ふ。乃ち、御謠して曰はく、

みつみつし 來目の子等が 垣本に 粟生には 菰一本 其のが本 其根芽繋ぎて

〔垣根の本に〕〔粟の生えているところに、臭うニラが一本、そのニラの根が芽まで全て〕

〔引き抜くように撃ち滅ぼしてしまおう！〕
撃ちてしまむ！

〔歌って言ったことには、〕

又謠ひて曰はく、

みつみつし 來目の子等が 垣本に 植ゑし山椒 口疼く

〔垣根の本に植えた山椒、その山椒を食べると口ピリピリ〕

〔その痛みが疼くように、私は「兄の死を」忘れぬぞ！〕
我は忘れず 撃ちてしまむ！

〔戦いの際に歌った者を〕

因りて、復兵を縦ちて急に攻む。凡て諸の御謠は、皆來目歌と謂ふ。此は歌へる者を

〔指して名づけたのである。〕

的取して名くるなり。時に、長髓彦、乃ち行人を遣して、天皇に言ひて曰はく、「嘗て、

〔天よりこの地に降り、鎮まりなされた。〕

天神の子有りて、天磐船に乗りて、天より降り止る。號けて櫛玉饒速日命と曰ふ。

〔「いろいろも」同母妹〕

是吾が妹、三炊屋媛、亦の名は長髓媛、亦の名は鳥見屋媛と娶ひて、遂に兒息有り。名

をば可美真手命と曰ふ。故、吾、饒速日命を以て、君として奉へまつる。夫れ、天神の

子、豈兩つの種有らむや。奈何ぞ更に天神の子と稱して、人の地を奪ふ。吾、心に推せば、

必ずしも信とはなさず」と。曰はく、「天神の子、亦多くあり。汝が君とする所、是實に

天神の子ならば、必ず表物有らむ。相示せ」と。長髓彦、即ち、饒速日命の天羽と矢

一隻及び歩鞞を取りて、天皇に奉り示す。天皇、覽じて曰はく、「事虚ならず」と、還り

て御ふ所の天羽と矢一隻及び歩鞞を以て、長髓彦に賜ひ示す。長髓彦、其の天表を見

て、益蹶踏を懐く。然れども、凶器已に構へて、其の勢、中に休むことを得ず。而

して、猶迷圖を守りて、復改むる意無し。饒速日命、本より天神慇懃にするは、唯天

孫是のみならんかと知れり。且つ夫の長髓彦の稟性愎り很らひ、教へて天人の際を以て

〔我が君としてお仕え申し上げている。〕

〔心の内で推理するに。〕

〔磐余彦が言ったことには。〕

〔その証があるはずだ。見せてみよ。〕

〔そなたの言ったことは真であった。〕

〔天つ神の印〕

〔その形勢を途中で止めることができない。〕

〔慇懃〕痛く心配する

〔天性は人に従わず。〕

〔神と人との分際を考えて〕

〈行動させることはできまいと見て〉

すべからざることを見て、乃すなはち殺しつ。其の衆を帥ひきみて歸順まつろふ。天皇すめらみこと、素もとより饒速日命

〈軍勢を率いて投降した。〉

は、是これ天くだより降しかれる者と聞く。而して、今果して忠效を立つ。則ち褒めて寵めぐみたまふ。此物これモノノベノ部

〈遠い祖先である。〉

氏ウヂの遠とほつ祖おやなり。

〔日本書紀〕卷第三、即位前紀戊午年

■凱旋と即位

（長髓彦を破り、ついに大和を平定した磐余彦——、畝傍山東南の檀原に宮を造営し、「事代

主神」〈大和高市郡の神〉の子である「媛蹈鞯五十鈴媛命」を正妃（第一婦人）とし

て、辛酉の年に即位する。第一代神日本磐余彦天皇、漢風諡号「神武天皇」の誕生であ

る）

〔辛酉の年〕＝東遷八年目に当たる）

辛酉の年の春正月の庚辰かのえたつ つきたちの朔つきたちに、天皇、檀原宮カシハラノミヤに帝位に即つく。是歳このとしを天皇の元年

とす。正妃を尊びて皇后とす。皇子、神八井命・神渟名川耳尊カムヤキノミコト カムヌナカハミミノミコトを生む。故かれ、古語ふることに稱たた

へて曰いはく、「畝傍ウネビの檀原みやはしらそこに、宮柱いは底ふとしきつ磐タカマノハラの根ちぎたかしに太立はつくにしらすて、高天原はつくにしらすに搏風峻峙りて、始馭天下

すめらみこと
天皇
」と號けて神日本磐余彦火と出見天皇
と曰ふ。

(『日本書紀』卷第三、神武天皇即位元年)

「畝傍山」遠景

(図説日本の古典『萬葉集』、伊藤博・上原和・黛弘道 編、

一九七八年三月、集英社)

